

『韓国語教育研究』(第2号) 別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

仙台に居住する韓国人児童の継承語支援教育
—土曜教室での実践から—

宋 貞熹・黄 淵熙

日本韓国語教育学会

2012年9月

仙台に居住する韓国人児童の継承語支援教育 —土曜教室での実践から—

宋 貞熹・黄 淵熙

日本に永住する外国人の増加に伴い、日本の小・中・高校に通う外国人児童生徒の数も年々増加している。グローバル化が進むにつれて、公教育の場においても外国人児童の継承語教育の必要性に関する意識が高まってきている。しかし、外国人児童に対する公教育は日本語指導が主な内容であり、彼らが継承語を習得するための場は家庭に限られている現状にある。東京、大阪など外国人の集住地域では韓国人学校および民間による継承語教育の支援教室はあるものの、他の地域におけるサポートは少なく、日本の中で自国の言語および文化を子どもに継承したくても、多様な環境の中で親の母文化および母語を子どもに伝える機会が少なく、子どもの健全なアイデンティティの育成にも影響を与えている。本稿では、東北地方の最大都市であり韓国人学校がない、宮城県仙台市地域を対象とし、韓国人児童の継承語教育を目的として筆者らが韓国人親達とともに開設した土曜教室の実践内容および運営状況を報告する。運営方法の工夫とともに土曜教室が参加児童および親に与えた影響を述べる。さらに、付随的に得られた継承語教室の意義および課題について述べる。

1. はじめに

グローバル化の進行により日本に在住する外国人は年々増加傾向にある。日本における外国人登録者数は、平成 23 年現在、207 万人を超えている。その多くは、従来の公館・企業などの一員として日本に勤務する一時滞在の形態から、国際結婚や就労による長期滞在、定住という形に変化している。それに伴い、日本の小中学校で日本語を学習言語として学ぶ外国人児童の数も増加しているのが現状である。

日本政府は、平成 18 年 12 月 25 日に外国人労働者問題関係省庁連絡会議において「生活者としての外国人」に関する総合的対応策を取りまとめた。その対応策では、「わが国としても、日本で働き、また生活する外国人について、その処遇、生活環境等について、一定の責任を負うべきものであり、社会の一員として日本人と同様の公共サービスを受容し生活できるような環境を整備しなければならない」と述べられており、そのような取組みの一つとして外国人児童生徒の教育が位置づけ

られている（文部科学省、2008）。

しかしながら、同報告からの主な提言事項は、①JSL (Japanese as a second language: 第2言語としての日本語) カリキュラムの普及・定着、②日本語能力の測定方法・日本語指導のガイドラインの開発、③日本語指導に対応した教員の育成・確保、④外国人児童生徒の支援員の配置などで、主に日本語指導を中心内容としている。それは、福田・末藤（2005）が明治以後の日本の外国人児童生徒に関する政策を考察し、日本の学校は外国人の子ども達にその民族の言語や文化を保持し発達させる方向での教育を行わず、彼らを日本語と日本文化に適応させる「同化教育」に中心をおいているという指摘と通じるところがある。

平成18年現在において、全国の公立小・中・高校に在籍する外国人児童生徒は7万人を超えており、そのうち約2万2千人は日本語指導が必要である（文部科学省、2008）現状を踏まえると、日本語指導に力を入れることは当然のことであると考えられる。

一方、中島ら（2011）は、「日本の公立小中学校で日本語を学習言語として学ぶ外国人児童生徒は、日本語が優勢言語である社会的なプレッシャーのもと、家庭で親が使用する母語（子どもにとっては継承語）が伸び悩み、親が母語で話しかけても子どもは日本語で応答するという状況に陥りがちである。このような2言語使用は親子のコミュニケーションに支障を来たすばかりではなく、2つの文化にまたがる健全なアイデンティティーを育てる上でも、また年齢相当の学力を獲得する上でも大きな支障となるものである」と指摘している。すなわち、外国人児童の全人格的成長と健全なアイデンティティーの育成のためには、彼らの継承語の保持・伸長を図る必要があるものと考えられる。

しかし、現在の日本の小・中学校などの公教育の中では継承語の重要性に関する意識は不足しており、積極的に継承語を保持・伸長させるための取組みは極めて少なく、外国人児童の継承語教育に関しては、学校外のサポートに頼るしかないことが現状である。公教育以外のサポートとしては、大別して外国人学校での継承語教育および放課後や週末に行われる継承語・母語教室がある。日本国内の母語・継承語教育の現状としては、平成16年の時点で日本には朝鮮学校、韓国学園、中華学校をはじめとするアジア系外国人学校と欧米系のインターナショナル・スクール、ブラジル学校・ペルー人学校などの南米系の外国人学校、その他フィリピン人学校

があることが松本（2005）により報告されている。そのうち、韓国学園は4校あることが報告されているが、その地域は外国人児童が集住している東京、大阪、京都といった特定の地域に限られている。

一方、外国人児童が集住していない他の地域における継承語教育は、個々の家庭での親の教育もしくは親やボランティアの活動を中心とした週末教室などに任せられている現状がある。

そこで、本稿では、東北地方の最大都市であり韓国人学校がない、宮城県仙台市地域を中心として筆者らが実践している継承語教室を紹介するとともに、継承語教育の意義とその課題について考察することを目的とする。

2. 本稿における用語の定義

「外国人児童」ということばは、日本の学校に通う外国籍の子どもという狭義の意味に加えて、長い海外生活の中で外国の言語・文化の影響により行動や思考の体系が形成された日本国籍の子どもまで含む広義の意味まで様々な定義で使われているが、本稿では、子どもと両親が外国籍、または両親のいずれかが日本以外の言語・文化的背景を持つ子どもとして定義する。また、本稿での「韓国人児童」とは、韓国語を母語とする両親を持つ子ども、または国際結婚によっていずれかの親の母語が韓国語である子どもとして定義する。

「母語」は、初めて覚えたことばであってもっともよく理解でき、もっとも頻繁に使用することばとして定義し、「継承語」は子どもがおかれている環境において毎日使うことばではないものの、親から受け継いだことばとして定義する。ここで継承語は、主に家庭を中心にして使用され、子どもの優勢言語は親の母語ではなく、毎日生活している現地語である場合が多い（中島、2003）。

本稿で対象としている韓国人児童の場合、親の母語である韓国語を生活言語として使用せずに現地語である日本語を使用する子どもが大半であり、「母語としての韓国語」ではなく、親から受け継いだ「継承語としての韓国語」の観点から論じる。

3. 土曜教室の運営

自分の子どもが韓国語を話せてほしいと望んでいるものの、様々な理由により家庭内で継承語教育の実践に困難を感じている韓国人の親達と筆者らは、子ども達に韓国語教育を行う目的で、韓国語教室を2010年11月1日に仙台で開設した。

開設場所を探す中で、駐仙台総領事館および仙台韓国教育院に伺い相談を重ねた結果、在日本大韓民国民団宮城県地方本部（略称「民団宮城」）の講義室を無料で借りることになった。教室名を「친구들（友達）」とし、韓国政府から「ハングル学校」として認定され、教材費や運営費に充てる支援金を頂くことになった。ここでハングル学校とは、外国に居住している韓国人に韓国の文化や韓国語を教える定時制の週末学校などを意味する。

また、在仙台韓国人の親睦会である「仙台市韓国人国際文化交流会」からも支援を受け、教師や学生ボランティアの交通費の一部を支給している。受講料は無料とし、そのために講師料やアルバイト代は支給できず、ボランティアとして活動している。

教室の運営は筆者らが責任者兼教師として活動しており、授業には子ども達とともに子どもの親も一緒に参加し、親達がボランティア教師として互いの子どもの個別指導にあたるようにしている。授業時間は土曜日の午後3時から4時半までとし、年35回実施している。2012年9月現在、幼児部が7人、小学部が12人、読み書き部が5人、日本人親部が4人の計28人が通っている。さらに、韓国や韓国語または異文化交流、子ども教育に関心を持っている日本人大学生および韓国人留学生が、スタッフとして毎回5人程度参加している。

参加している子ども達の両親は、いずれも韓国人の場合、韓国人と日本人の場合、在日3世と日本人の場合、日本人の両親とともに2年間韓国での居住歴を持つ子どもの場合など多様である。韓国語を話す能力についても、韓国語で日常的なコミュニケーションがとれる子どもから、簡単な挨拶ができる程度の子どものまでおり能力差が大きい。

教室の主な年間行事を<表1>に紹介する。

<表1> 2012年 韓国語教室「친구들」の主な年間行事

1月 開講式	7月 1泊2日の夏キャンプ (水の森公園キャンプ場で)
2月 ソルナル (韓国のお正月) 紹介	9月 チュソク (韓国のお盆) 紹介
3月 音読カードの提出および反省会	12月 父母の親睦会、 クリスマス会&終業式
6月 親子親睦会 (水の森公園で)	

4. 土曜教室の実践

4.1 幼児部

(1) 幼児部の授業内容

幼児部は2歳から小学校入学前の子ども達を対象としており、毎回の参加者は5～7名程度である。幼児部の学習は、韓国語と韓国文化に触れることで継承語に対する肯定的経験を積み重ね、今後の継承語学習へのモチベーションを高めることを目的としている。そのため、読み書きの学習は最小限とし、その日のテーマに沿って「楽しい経験を韓国語で行う」ことをカリキュラムの中心においた。テーマに関してはその日によって異なるが、全体的な授業の流れとして、①全体授業への参加、②始まりの挨拶、③絵本読み、④テーマの紹介、⑤テーマの拡大、⑥終わりの挨拶としている。

①と⑥の挨拶では、「안녕하세요? 저는 ___ 예요. (こんにちは。私は___です。）」、「안녕히 가세요. 감사합니다. (さようなら。ありがとうございました。）」の挨拶を、おもちゃのマイクを使って一人ずつしてもらい、韓国語による挨拶の定着および人前で韓国語を喋ることに対する自信を育むことを意図している。③の絵本読みは、幼児期の子どもが好きな活動を韓国語で行うことで、語彙の拡張とともに将来の読みに対するモチベーションを高めることを目的としている。はじめは日本でもよく読まれている絵本を選び、子ども達が既に知っている内容の絵本を韓国語で読み聞かせることで、理解できたという感覚を引き出すことを中心に据え、

徐々に韓国固有の文化を含んだ内容の絵本選びへと発展させている。④と⑤のテーマに関しては、幼児期の子ども達の興味対象である動物、植物、食べ物、乗り物、色などをテーマとして選び、直接体験できる内容のカリキュラムを用意している。例として<表2>に指導案の一例を紹介する。

(2) 子どもたちの様子

子ども達は、家庭内言語環境においては様々な背景を持っており、普段から韓国語を家庭内言語として使っている児童もいれば、決まっていたいくつかの表現以外は日本語が圧倒的に多く、韓国語はほとんど喋れない子どももいる。異なったレベルの子ども達を教える方法として



クラスを分けることも考えられるが、本教室の幼児部では敢えて様々なレベルの子ども達を一つのカリキュラムで教えることでお互いの能力に対する刺激を得ることができている。また、授業時間以外の遊びの時間にはお互いに日本語を使っているものの、韓国語能力が混在する構成にすることにより、授業中は教師の質問に対して積極的に手を上げ、韓国語で答えようとする傾向が言語能力に関わらず見られる。また、遊びが中心になる活動が多いため、お互いを友達として認識し、友達に会えて遊べる場所として韓国語教室を認知している子ども達が多い。このような環境の形成が、今後、韓国語を継続して学び、母文化に対して誇りを持つ礎になるものと考えられる。

4.2 小学部と読み書き部

(1) 小学部と読み書き部の授業内容

小学生以上の子ども達の家庭内言語環境や韓国語能力についても幼児部と同じくその能力差が大きく、能力とともに年齢に応じたクラス編成も考慮する必要がある



る。そこで、韓国語によるコミュニケーションがある程度できる子ども達で「読み書き部」を構成し、その他の子ども達は「小学部」とし、小学部はさらに低・中・高学年に分けて1グループを3～4名で構成している。授業は主に韓国語で行い、親または韓国の親族とコミュニケーションができることおよび文字の学習により将来1人で韓国語の本が読めるようになることを目標としている。

授業の流れとしては、その日のテーマに沿って用意した視聴覚教材や資料などを用いて、参加者全員で歌やゲームを行う。全員で参加することで参加者同士の交流を促進することおよび言語能力の差によってお互いに刺激を得ることで、学習意欲の維持・向上を図っている。全体授業の終了後、各グループに分かれ、指導に意欲のある親1名が各グループの教師となり、さらに1～2名の親が補助教師として指導にあたる。小学部では、毎回12名程度参加しており、ほとんどの子どもは身近な語彙がわかる程度で、簡単な会話ができるレベルである。韓国で人気のある童謡や、よく知られている「うさぎとかめ」の話などを教材として使用し、音読練習や文字の学習を行っている。面白い童謡や既知の物語を韓国語で学習することで、語彙の拡張および継承語学習のモチベーションを効果的に高めることができる。

また、読み書き部には小学2年生から中学2年生までの5名で構成されており、継承語の保持・伸長を図ることを目的としている。その日のテーマに沿ったフリートークを行う際、文法の間違いなどを指摘せずに積極的な発言を促すように心掛けており、文法学習のための時間はテーマ拡張の時間として別に設けている。また、教室で学習した内容を家庭でも継続して学習できるように、「音読カード」を定期的に配布・回収し、褒賞をすることで学習のモチベーションを高めている。

それぞれの授業内容について、〈表3〉と〈表4〉に指導案の一例を紹介する。

(2) 子ども達の様子

小学部以上の子ども達は年齢別に興味の差、学習に取り組む姿勢などに差が大きいため、低・中・高学年別にクラス編成し、それに応じた指導法を工夫している。例えば、低学年の場合は幼児部の延長として遊びの内容を中心としなが



らも文字の学習を取り入れることで、楽しく学習に臨みながら文字への興味も示してくれている。中・高学年は、文字の学習に対して意欲的であり、常に補助教師がとなりで学習支援にあたることで子どもの能力に応じた指導が可能になり、子ども達の集中している姿も見られる。ここで、補助教師は自分の子どもの指導にあたるのではなく、他人の子どもの指導にあたるように編成しており、甘えることなく学習できる環境を作ったことも効果的であると考えている。

一方、グループ間の様子が互いに聞こえている状態にあるため、自分の親が一生懸命他の子どもを教えている様子が見えることで、親に対する敬意とともに学習意欲が高まる効果が得られている様子である。ある子どもは「他の子どもが自分の親と韓国語で上手に話している姿を見て、自分も韓国語で親とすらすら話してみたいと思うようになった」という声もあった。なお、本教室に通ってよかったことを子ども達に聞くと、学校の同級生から韓国語を教えてほしいと言われ教えることができたことがとても嬉しかったとの声もあった。

4.3 教室外における活動

子どもに親の母語を継承させるためには、家庭内では親の母語で子どもとコミュニケーションを取り続けることおよび外ではその言語と一緒に共有できる仲間を持つことが必要である(宋、2010)。そこで、本教室では子ども達が仲間と一緒に楽しく韓国語や韓国文化に接



する機会を増やす目的で、教室での学習以外の活動として野外活動や夏のキャンプを開催している。キャンプは仙台市水の森公園のキャンプ場で1泊2日間の日程として実施した。参加者としては、本教室の子ども達の他に盛岡・山形・福島の韓国語教室に通っている親子からの参加も受け、韓国の遊びなどを通して韓国語と韓国文化に触れることで、約50名の親子が交流、親睦を深められた。また、本教室では定期的に「お知らせ」を発行し、日程や行事を掲示するとともに、親向けの情報を

日本語と韓国語で発信しており、その一例を<表5>に示す。

<表2> 幼児部の指導案

指導目標：身体部位の名前を韓国語で言える			
<指導内容>			
項目	活動	活動内容	教材・教具
始めの挨拶	始めの挨拶を一人でする	立って自分の名前と挨拶を韓国語で行う	おもちゃのマイク
絵本読み	指導者による絵本の読み聞かせ	お医者さんが出てくる絵本読みを通して身体部位の名前を聞く	絵本
テーマの紹介	身体部分の名前を紹介する	ポスターや実演を通して身体部位の名前を韓国語で紹介する	ポスター
テーマの拡張①	聞いた身体部位の名前を身体遊びを通して覚える	「붙었다. 붙었다. 어디? (くっついた。どこが。)」という身体遊びを通して身体部位の名前を覚える	
テーマの拡張②	聞いた身体部位の名前をゲームを通して覚える	中が見えない箱から身体部分の名前が書いてあるカードを選び (大人が読んであげる)、大人が立っているところに行き、カードと同じ部分にシールを張る	箱、シール、名前カード
<反省と次回の計画>			
<p>共同作業およびシール貼りなどの遊びに興味を示したのでそのような要素を継続的に取り入れる必要があると考えられる。次回は、身体部位とその役割を学習する予定である。</p>			

<表3> 小学部の指導案

指導目標：動物の名前を韓国語で言える			
<指導内容>			
項目	活動	活動内容	教材・教具
導入部	童謡を歌う	韓国の童謡「곰 세마리(三頭の熊)」を踊りながら歌う	童謡 DVD
テーマの紹介	動物の名前を紹介する	絵カードと文字を交互に見せながら、動物の名前を学習する。	子ども向けのウェブ学習教材 www.kebikids.com
テーマの拡張①	動物の鳴き声を紹介する	動物の名前を覚えながら、鳴き声も韓国語で真似してみる (擬声語・擬態語の学習)	
テーマの拡張②	母音と子音の組み合わせの簡単な単語を書く練習	母音を中心に復習をした後、「여우, 소, 하마, 개, 고래, 기린, 양, 곰, 고양이」のような簡単な子音と母音でできている動物の名前を書く練習を通して文字の学習を行う	テキスト 「キタン国語」
<反省と次回の計画>			
<p>指導者による授業内容の説明後、親と学生の補助教師がそれぞれ2～3人ずつ担当して書き方などを指導しているが、説明言語として日本語を使う場面が多く見られた。打ち合わせなどを通して韓国語と接触できる機会を増やすためにできる限り韓国語による指導を行うように説明する必要がある。次回は、数え方と動物の特徴を表現できるように簡単な形容詞を学習する予定である。</p>			

<表4> 読み書き部の指導案

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 指導目標：夏休み中の出来事が言える </div>			
<指導内容>			
項目	活動	活動内容	教材・教具
導入部	夏休み中の出来事について話し合う。	指導者が子ども達に夏休み中の近況について質問し、答える	
テーマの紹介	指導者による対話文の説明	夏休み中の出来事についての対話文を一文ずつ発音し、語彙・文法などを学習	海外居住者向けの韓国政府のウェブサイト「 study.korean.net 」から学習資料を印刷して使用する
テーマの拡張①	ロールプレイ	対話文を使って、ロールプレイに取り組む。 また、自分の経験を簡単に発表する	
テーマの拡張②	対話文で使われた表現に関連のある文法事項の確認と練習	表現：「-에 다녀왔다 (-に行ってきた)」 文法：「-아/어/해 지다 (-くなる)」 語彙：1. 形容詞の学習 2. 不規則用言の活用	
<反省と次回の計画>			
指導者の主導で授業が進行されているため、子ども達は指導者の質問に対する受け答えをする場面が多く、子ども同士で質問する機会がほとんどなかった。次回は、子どもが質問する機会を設け、積極的に授業に参加できるようにする必要がある。また、本日は「話す・聞く・読む」ことに重点をおいたので、次回は簡単な文章の作文をつくる予定である。			

<表5> “친구들 チングドゥル” (2011年1月29日 第5号)

“チングドゥル”に通うようになってから、子ども達に何か変化はありましたか？
家で韓国語を使う機会が以前よりも増えたという声が聞こえてくるようになりました。

さて、子供と韓国語で接する時、子供の間違いを正しく直すことにこだわり過ぎてはいませんか？子供をバイリンガルに育てたい親のために書かれた『バイリンガル・ファミリー (明石書店)』という本によれば、子どもが間違った表現や発音をしたときに、その都度直す行為はさほど効果がないばかりか、逆に子供のやる気を低下させてしまうといます。

例えば食事の時、テーブルに並んだ大好物を前にした子供が「わぁーおいしい！！」と間違えて言ったらどうしますか？「まだ食べる前だから、そういう時は“おいしそう”と言うのよ」と、すかさずNGを出したりしてはいないでしょうか？そういう場合、あれこれ説明などせず「わぁー本当においしそう」と正しい表現でさりげなく言ってあげるだけで、子供はその違いに気づくといいです。もちろん、気がついたからといってすぐに使えるようになる訳ではありませんが、そのようなシチュエーションの繰り返しの中で自然に習得していくのだそうです。学校の先生や私たち親は、子どもの発音を直す時、同じ単語を繰り返し何度も言わせるという方法をとりますが、どうやらその方法はあまり効果的とはいえないようです。

外国語として語学を学ぶ時、いくらその場で繰り返し発音の指導を受けてもなかなか正確な発音にたどり着けなかったことを思えば、納得できるような気がしませんか？正しく直そうとすることよりも韓国語と接する機会をたくさん与えること。そして、教え込むのではなく親子のコミュニケーションの中で、より多くの正しい韓国語を聞かせることの方が大切なのではないでしょうか。

たとえ子どもの発音や表現が少々違っていても焦らず、まずは子供のやる気を伸ばすことを第一に考える……【ローマは一日にして成らず】……です
(笑)。

5. 考察

韓国語の土曜教室を開設し、運営してきた結果、以下の意義も見出された。

まず、親子の継承語教育に対するモチベーションが向上したことである。仙台市には韓国人の集住地域がなく、居住地域が分散しているために韓国人のコミュニティ形成が困難であり、モチベーションの維持は容易ではない上に、親達は「家庭で韓国語を使うと子どもの言語発達が遅れるのではないか」、「韓国語を使うように強要すると日本語による学校での学習に影響があるのではないか」といった様々な悩みを持っている。一方、本教室を通してそのような疑問を共有し話し合う仲間ができたことで、親の継承語教育に関する意識を高めることができる。また、子どもにとっては、韓国語は親とのコミュニケーション言語という位置づけから、大人達や仲のいい友達が使うことばという位置づけに拡大したことで、韓国語の学習に対するモチベーションが向上するとともに韓国語に対する肯定的感情につながっているものと考えられる。

また、本教室は日本人のための異文化交流の機会も提供することができる。韓国と韓国語に興味を持つ大学生や将来子どもと関わる仕事を志望している大学生の実習の場としても機能している。韓国語を媒介として異文化に接することは学生にとって良い経験になる上に、韓国人の親子にとっても日本文化を理解することにつながるものと考えられる。なお、両親が日本人で韓国に数年間滞在した経験のある日本の子ども達にとっては韓国語能力の持続につながっている。

さらに、本教室で補助教師として活動している韓国人親と子ども達の、日本における韓国人としての立場、役割および意識の向上に貢献していることがある。韓国人親は韓国文化の伝達をはじめとする学校や地域社会との関わりにおいて、以前より自国の文化やことばを積極的に知らせる努力をするようになったとのことである。自ら教育する経験を通して、韓国文化の紹介など、学校や行政からの依頼に対しても自信を持って対応できるようになった。そして子ども達にとっても、韓国語を学んでいることで親の母文化・母語を肯定的に受け止めるようになり、学校でも同級生らに韓国文化を伝達しようとする傾向が見られている。

6. まとめと課題

本稿では、東北地方の最大都市であり韓国人学校がない、宮城県仙台市地域を対象として継承語教室の実践例を報告した。解決していかなければいけない課題も多く残っている。まず、他の継承語教室にも共通する問題であるが、通っている子どものニーズやレベルの多様さにどう対応していくかが挙げられる。現在はグループ分けや、共通のテーマでレベルごとに教えるなどの工夫をしているが、今後カリキュラムや教材面での体系化が必要と考えられる。また、実施頻度および時間数の不足の問題が挙げられる。多くの国で土曜日の継承語教室というとほとんどは全日費やす教室を意味するが、本教室は年 35 回、毎回 1 時間半の短時間で運営されている。この問題は、場所の確保、教師の不足、子ども達の時間的制約などとも関連し、真の継承語の伸長を目指すことは容易ではない。さらに、本教室のようなグループ学習形態の場合、学校行事や部活、受験準備などによる欠席が、グループ全体の学習進度に影響を与える。

日本では、外国人児童生徒の教育において日本語の習得が第一課題とされてきたが、日本語による学習が可能な児童生徒においても、母語の保持やアイデンティティの確保、学校不適応や進路選択に関する問題など、日本語第一主義では解けない問題が山積されている（高橋、2008）。また、母語が発達すれば、第二言語の伸長も早いという「2 言語相互依存説（Developmental Independent Hypothesis）」（Cummins, 2001）もあり、多くの研究者・実践家らから母語もしくは継承語の維持・伸長が必要であるとの認識も得られている。

しかしながら、アメリカやカナダの例で見ると公教育の中での母語・継承語教育は日本では行われておらず、継承語教育のほとんどは本稿で挙げた仙台の土曜教室を含む民間、ボランティア、親によって行われているのが現状である。カナダやオーストラリアで提唱されている継承語教育の意義として、「移住者の持ち込んだことばは国の財産であり、そのことばを保持し、育てることは国がそれだけ豊かになる」（中島、2001）という観点からも、本教室が担っている役割は大変重要だと言えよう。

参考文献

- Cummins, J. (2001). Bilingual children's mother tongue: Why is it important for education? *Sprogforum*, 7(19), 15-20.
- 宋貞熹 (2010). あなたの子供はバイリンガルでしょう?—日本語と韓国語のバイリンガル家族を対象として—. *日本韓国語教育学会*, 1, 187-194.
- 高橋朋子(2008). 日本生まれのニューカマーの子どもたちへの継承語教育について考える. *大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流*, 12, 61-74.
- 中島和子(2001). *バイリンガル教育の方法 増補改訂版 12歳までに親と教師ができること*. アルク.
- 中島和子 (2003). 「JHL の枠組みと課題—JSL/JFL とどう違うか」 Web 資料. (<http://www.mhb.jp/2003/08/jhljsjfl.html>)
- 中島和子・田中順子・森下淳也(2011). 継承語教育文献データベースの構築—中間報告—. *母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究紀要*, 7, 1-23.
- 福田誠治・末藤美津子(2005). *世界の外国人学校*. 東信堂.
- 松本一子(2005). 日本国内の母語・継承語教育の現状—マイノリティ自身による実践. *母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究紀要*, 1, 96-106.
- 文部科学省 (2008). 「外国人児童生徒教育の充実方策について」 Web 資料. (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301/001.htm)

(東北福祉大学 外国語兼任講師・東北福祉大学 子ども教育学科 講師)

韓国語教育研究（第2号）

2012年9月15日 発行

発行者 姜 奉植
発行所 日本韓国語教育学会
〒161-853 東京都新宿区中落合 4-31-1
目白大学外国語学部韓国語学科
編集者 『韓国語教育研究』編集委員会
文慶喆 ・ 柳朱燕 ・ 宋貞熹 ・ 金鉉哲 ・ 金殷模
印刷所 (株)ENTERPIA PRODUCTION